

スウ 落語

『三遊亭』

スウェーデンからの交換留学生で中央大学文学部に在籍したヨハン・ニルソン・ビョルクさん(32)。現在は「三遊亭じゅうべえ」と名乗る落語家で前座の修業中だ。日本の伝承話芸の担い手として注目されている。

日本テレビ系『笑点』のレギュラーメンバー、三遊亭好楽師匠のはし嘶に「ぬくもりを感じて」弟子入り志願。昨年7月15日に入門を許された。

前座修業中

東京・下町で行われた、ある日の

高座。身長185㎝の長身が現れた。いつもとは違う雰囲気客席はびっくりしている。じゅうべえさんは、長い足をたたんで話し始めた。

「ごらんの通り、日本人ではありません。スウェーデンからやってきて、なぜか落語家やっています。このあとは日本人が次々と出てきま

すから、ご安心ください」

場を和ませたあとは、歯切れのいい落語を展開した。この日の出し物は『桃太郎』

なぜ、おじいさんが山へ行くのか。おばあさんが川へ行くか。父が教え、息子が聞く。疑問に思った息子が突然、作者の意図をくんだ解説を始める。そのやり取りが面

エーデンから 界の新星誕生

『じゅうべえ』でございます

白い。鬼ヶ島へ連れて行くイヌ、サル、キジに関する^{うんちく}蘊蓄も傾けた。

じゅうべえさんは、巧みな話術で複数の登場人物を描き分け、観客の想像力をかき立てる。噺に落ちをつけて、一席終わると客席から割れんばかりの拍手だ。

落語家には序列があり、前座見習い、前座、二ツ目、真打へと昇進。二ツ目から羽織の着用が許され、落語家と名乗れる(上方落語を除く)。

前座は修業の毎日だ。茶屋で師匠方のお世話をする。お茶を入れる。熱いの、濃い。人それぞれの好みに合わせる。高座着の着替えを手伝い、着物をたたむ。たたむものにも細かな約束事がある。

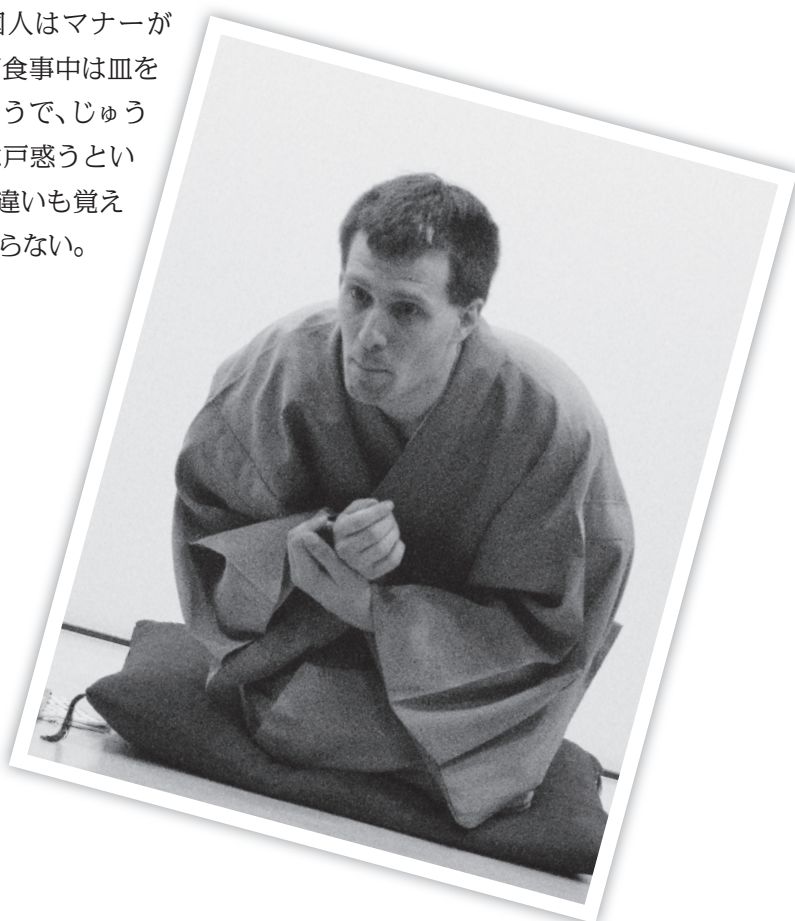
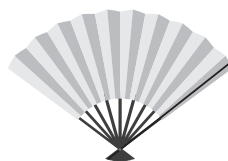
舞台上で座布団を裏返すのを高座返しという。よく見るシーンで、一席が終わり、場を変えるために行う。ここにも仕来りがある。

四方の房を伸ばす。客席へ布団の縫い目を向けてはいけない。切れ目のないお付き合いをお願いします、との気持ちを込めている。

夏の暑い日でも、外出時には長

袖を着る。観客に腕を見せて灸をすえ、我慢する噺もある。日焼けしていたのでは、それこそ噺にならない。

噺の中でご飯茶わんを持つ場面がある。何気ない動きであっても、多くの外国人はマナーが悪いとして食事中は皿を持たないようで、じゅうべえさんは戸惑うという。習慣の違いも覚えなくてはならない。





現代に生きる若者でもすぐには理解できないことの数々を外国人が習い、ソツなくこなしていくのは大変だ。

1985年10月3日、スウェーデンの首都ストックホルムから南へ車で約40分の国内第4の都市、ウプサラで生まれた。子どもの頃は「ドラゴンボール」「ナルト」など日本のアニメやマンガに夢中だった。日本に興味を持つきっかけとなり、日本語を覚えた。

高校に入学すると日本語クラスがあった。日本語熱が再燃し、ストックホルム大学では日本語を専攻した。

猛勉強の末、学内の交換留学生となり、名古屋市の南山大へ短期留学。一時帰国を経て大学4年次に再度来日。「行って見たかった東京」の中央大学文学部で1年間学ぶことになった。26歳の春だった。

「『新歓』で落語だ、落研だと言われて、何だか分からなかったけど行ってみたらコントやら漫才やらが面白かった」

日本語はほとんど分かっていたが、落語は知らなかった。「スウェーデンにはないですよ」と、いたずらっぽく話す。

「落語研究会」に入部。当初は正座が^{うめ}できずに呻いた。演劇もやってみたくて「第二演劇研究会」にも籍を置いた。人を楽しませる、喜ばせるのが好きなのである。

在学中は白門祭などに出演。長身のため、部所有の高座着物の寸法がギリギリで苦労したものの、熱演で来場者をうならせた。中大落研のファン獲得に大きく貢献した。

卒論に落語

留学を終えて帰国し、ストックホルム大を卒業した。卒論は「落語」にした。

29歳の春に再度来日。東京都内の演劇専門学校で3年間学ぶ一方、寄席へ通い、落語を楽しんだ。次第に自身も高座へ上がりたくなくて

いく。好楽師匠の話芸にほれ込んだのは、嘶に「ぬくもりを感じたから」だという。

同師匠らが定席とする東京・両国寄席の口演後、覚悟を決めて弟子入りを志願した。情熱を注ぎ、日本語で書いた手紙を携えていた。

スウェーデンの両親は、じゅうべえさんによると「好きなことをやりなさい、と言ってくれます。落語が何か、たぶん知らないと思いますが、何とかなるだろうってもんです」と話しているという。

「落語は扇子と手拭いだけ持って、一人で老若男女を何人も演じます。喜びも悲しみも全部一人でやります。不思議な世界です。すごく面白い」

いずれは外国で演じる日も来るだろう。落語を世界へ広めるのも、自らの役目だと思っている。



好楽師匠の教え

両国寄席の客席の真ん中で笑っている外国人がいますね。トリ(その日最終演者)を終えると、お弟子さんがあたしに「外国人の男性が師匠にお会いしたい、と言っています」

喋^{しゃべ}っているときから気になっていた人です。その人が「弟子にしてください」と言うじゃあ、ありませんか。

今はじっくり話せないから連絡先を教えてください。そう言うと、手紙がずっと目の前に。うちに戻りカミさんと一緒に見ました。

漢字とひらがなで、三遊亭好楽さま。裏返すとヨハン・ニルソン。

『誠に恐縮でございますが…』と文面も漢字なんです。『唐突なお話で申し訳ありません』。これも漢字です。『いろいろな師匠の噺を聴きました。好楽師匠は、ぬくもりがあります。ぜひ弟子にして頂きたい』と。手紙は3枚ありました。

その後、会いましてね。いいの？ ここで。「はい、修業させてください」。それではイチからやりましょうって。

焦っちゃいけない

落語を覚える前に、まず、あいさつ、正座、言葉遣い、しきたりといろいろある。そういうのを覚えていくうちにだんだんと分かる。最初は意味が分からないもんだ。

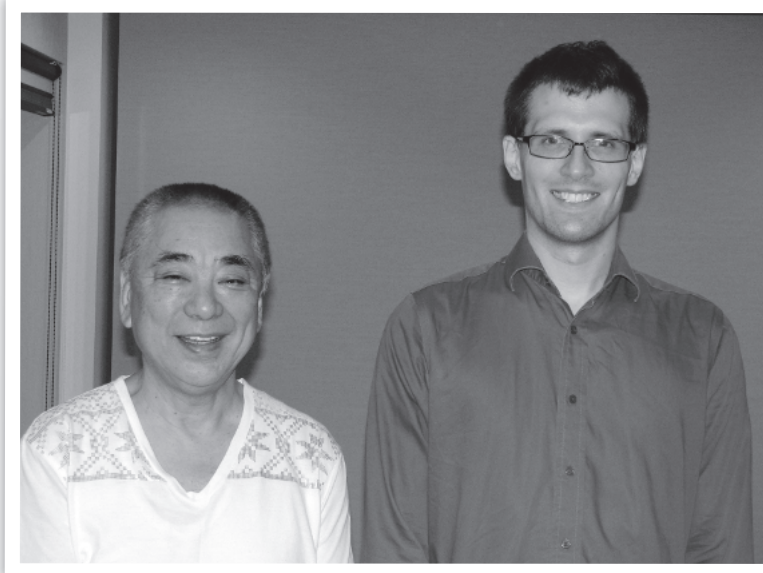
落語にもあるように、一杯飲ませてちょうだい、いっぱい飲ませて。言い方で意味が違って来る。箸と橋もそう。難しいけれど、兄弟子が注意してくれるし、あたしも注意します。やっていくうちにだんだん分かってくる。今、そういう段階です。

今日やったことが明日できる、なんて思ってません。ウサギとカメなんですよ。

お客さんに受けない人は焦る。ほかの噺家を見て、あの人はあんなに上手にしゃべる、何が違うのかな…。

悩めます。この悩むことが大事なの。悩めば悩むほど、あとからジワッと出てくる。

じっくり貯めて・覚える。貯めて・覚える。貯めて・覚える。落語の世界はこの繰り返しなんです。江戸時代からずっとそうです。



噺をずっと覚えて、受けると天狗になりやすい。自分には才能があると思っちゃおう。後ろを見て、お前みたいなの、ろまはいねえよ、待ってらんねえや、とウサギは天下を取ったようだ。

カメは噺をこうやろうか、こうもしようかと練って練って練って、毎日毎日、汗びっしょり。いつの間にか、カメが上のほ

うへ。ウサギは抜かれました。

決して焦ってはいけない。駆け足しちやダメ。背伸びもいけない。いきなりうまくなってもいけない。

一つの噺を完成させるまで時間がかかります。噺に身が入り、自分の得意ネタにする、これは大きな財産です。私たちもみんなこうやってきました。スウェーデン人だけじゃない。

5年、10年、20年…。彼が30年ぐらい経って名人になったら、うれしいですよ。

10番目の弟子

落語がうまくなればいってもんじゃない。もっと大事なことを覚えなさい、と言ってます。人としての思

いやり、やさしさです。

落語はお客さまに喜んで頂くのが仕事。落語家が人をだましたり、ウソをついたり、えぼったりしちゃ、おかしいでしょ。自分を磨く。下手ならばもっと磨く。

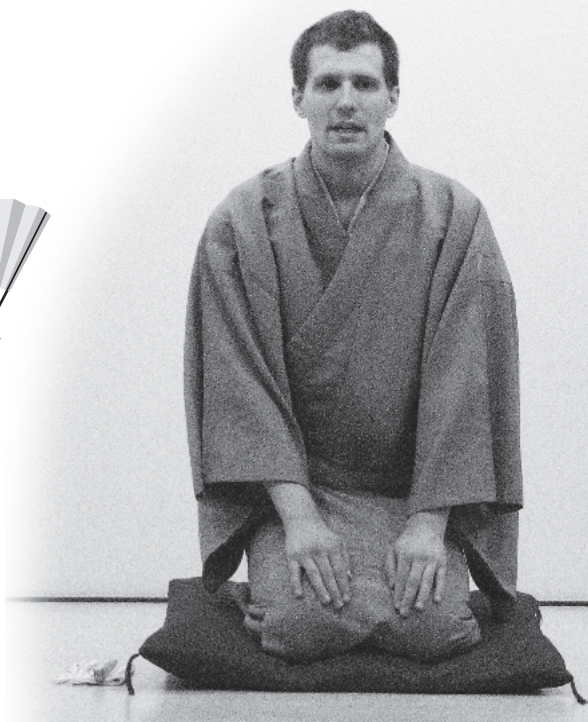
困っている人がいれば助けてあげたい。兄さん、ごはんに、一緒に食べましょうよ。後輩だったら、よっ一杯行こうよって。そういうことができる人間になってもらいたい。それがあたしの願いです。

世の中すべてご縁だと思っています。彼があたしのところに来たのも縁ですね。

じゅうべえはあたしの10番目の弟子です。名前を付けるとき、頭に浮かんだのは10番目だから、十兵衛はどうか。外国人にはカタカナ名を付けがちですがね。

本人は「侍みたいでカッコいい、ありがとうございます」って言う。皆さまに親しみをもって頂けますよう、ひらがなにしました。

三遊亭じゅうべえ、よろしく申し上げます。



プロフィール

さんゆうてい・こうらく師匠

1966年、19歳で入門。71年に二ツ目、82年に真打。日テレ系『笑点』には83年から34年間、レギュラー出演中。若手育成のために東京・台東区に独自の演芸場「池之端しのぶ亭」を運営している。東京都出身。71歳。

□スウェーデンの日本語教育



外務省HPや日本政府観光局によると、スウェーデンにおける日本文化への関心は高い。近年はアニメやマンガなど日本のポップカルチャーや日本食に対する注目度が高まっている。日本への観光客数も増加して、2016年は約5万人だった。

日本語教育は1956年にウプサラ大学で日本語講座が開設されたのが始まりで、その後、1963年にストックホルム大学、1974年にヨーテボリ大学、1980年にルンド大学で日本語講座が開始された。